

再発見・牛久第三話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

牛久沼内全域干拓(新田開発)①

江戸日本橋に新田開発奨

励の高札立つ(幕府徳川第

8代将軍吉宗の農村政策)

江戸時代中期、享保7年

(1722年)7月のことである。

幕府が江戸日本橋のたもとに、『新田開発を奨励する文言』を個条書にした「高札(※)」を立て、幕府領の農民のみならず、全国から新田開発の出資者を募った。高札は、それまでの商人による請負新田の禁止をとぎ、商人の資金導入を図ったものであった。(※法度などを板書きし、交通量の多い市場や辻に立てた制札で、立札ともいい、町

村民への触書の場合は町・村名主へ庄屋宅の前に立てられた。室町時代末期から明治6年(1873年)まで用いられていた)

新田開発奨励は、約30年間、江戸幕府の徳川第8代将軍の職にあり、諸改革を推進し、米将軍の異

名をもつ吉宗による政治改革、享保の改革の一環(農村政策)であった。

幕府へ桜井庄兵衛が牛久

沼内全域干拓の願書提出

『新田開発奨励』は江戸日本橋の高札を見てきた人によって、牛久藩領の河内郡城中村根古屋坪の農家桜井庄兵衛に伝えられた。庄兵衛は、牛久沼内全域550町歩(550ヘクタール)を干拓して新田を造成するという大構想を描き、享保10年(1725年)に諸書類を添付してその裁許を幕府に願いだした。

幕府御勘定所御勘定吟味役

井沢為永が牛久沼干拓裁許(代

替水路伊丹用水路開削の条件付き)

新田開発を担当する幕府の役所は、御殿御勘定所であった。同役所は主要役所で、江戸城本丸表御殿の一室に置かれており、庄兵衛は度々登城して担当の普請方並び

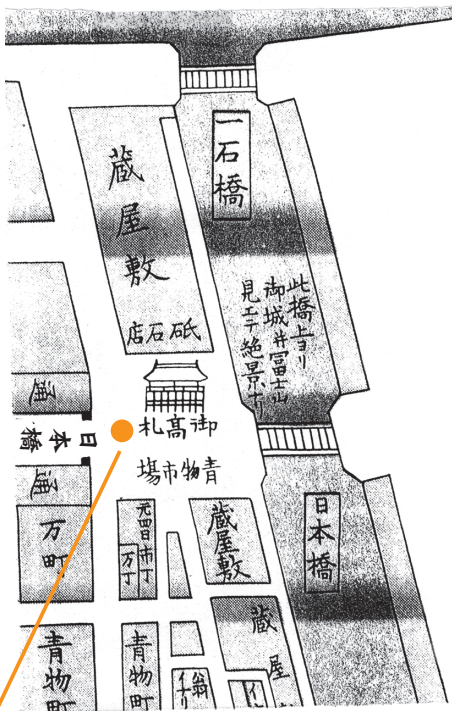
に新田方と接触し、特に新田開発を管掌している井沢為永とは接触を重ねていた。

井沢為永、通称弥惣兵衛は寛文3年(1663年)、紀伊国那賀郡溝ノ口村(現和歌山県海南市野上新)の根来寺僧兵の血を受け継ぐ農家井沢家で出生している。俊才であつたらしく少年のころから数理に精通し、28歳のとき紀州第2代藩主徳川光貞に召し出され、地下役として治水および新田開発普請に数々の手腕を発揮し、その工法は後の世で「紀州流または関西流」と称されている。

井沢は、享保7年(1722年)、59歳のときに江戸幕府に召し出されて旗本の列に加わり、御勘定所普請方となる。同8、9両年

に、新田開発の願書が届けられている武蔵見沼(現埼玉県)、下総の印旛沼・手賀沼(現千葉県)・飯沼(現茨城県)を検分し、同10年に牛久沼を検分。同10年に御勘定吟味役格に進み、同12年に新田開発を掌ることになる。同16年には吟味役本役(※)に進んで、同20年よりは美濃郡代を兼ねることになる。(※幕府における支払いに関する決済は、幕府全体の財布の紐を握っていた御勘定奉行勝手方の当該役人が「越し印」を捺し、御勘定吟味役が「中印」を、さらに御勘定奉行の決済判を必要とし、これを「三役の判」といった)

井沢が享保10年に庄兵衛の牛久沼全域を干拓して新田開発する件も裁許している。



江戸日本橋の畔に立てられた高札の位置
—江戸切絵図より引用—